

# 道端に咲く唄

## ストリートミュージシャン

### を考える

外国語学部  
英語英文学科3年

梶山 紫

筆者は神奈川県厚木市の出身である。厚木市

といえば、2011年・好きなアーティストランキングで嵐に次いで2位にランクインした今をときめくミュージシャン、いきものがかりのボーカル・吉岡聖恵を輩出した街である。彼らはインディーズ時代、本厚木駅、そして隣市の海老名駅を拠点とし、ストリートライブを行っていた。私も彼らがデビューする直前に海老名駅に隣接する商業施設ピナウォークの広場で歌っているのを見かけたことがある。彼らの様に「ストリートミュージシャン」からメジャーデビューを果たし、人気アーティストとなった歌手やグループは多数いる。北海道の狸小路商店街で歌っていた高橋優。福岡県の駅前で胡坐をかいたスタイルでストリートライブをしていたYUI。渋谷を始め都内の駅前中心にエレキピアノの弾き語りを1000回

行った川嶋あい。

元々、ストリートライブは大阪や東京の歩行者天国でストリートライブを行っていたJUNSKYWALKER(S)<sup>ii</sup>などのバンドが起源だと言われているが、現在はストリートミュージシャンというと、アコースティックユニットのイメージが強い。これは今やストリートミュージシャンの代名詞となりつつある、ゆずら90年代に登場したストリートライブからデビューを果たしたフォークデュオの功績が大きいと考えられる、

ストリートから発生した「ネオ・フォーク」

ゆずは横浜市磯子区出身の北川悠仁と岩沢厚治から成る2人組で、伊勢佐木町の商店街でストリートライブを行っていた。メジャーデビュー後の最後のストリートライブには台風の中にも

関わらず7000人も

の観客がその姿を見ようと集まったという伝説がある。このゆずと同時期に登場したのが岡平健治



ゆず<sup>\*1</sup>

と岩瀬敬吾の19(ジューク)だ。優等生的なビジュアルのゆずに対し、奇抜な服装や髪形、そして326とのコラボレーションで注目を集めた彼らは1999年の春に『あの紙ヒコーキくもり空わって』でデビュー。2002年に解散し、現在はそれぞれソロやグループでの活動を行っているが、人気絶頂期に解散したため伝説とされている。ゆず・19の登場で、それまで時代遅れとされていたフォークソングが新しいものとして再度注目を集め、新時代のフォークソングを意味する『ネオ・フォーク』という語が生まれた。

\*1) ゆず Excite music ([http://image.excite.co.jp/music/closeup/0705/yuzu\\_photo.jpg](http://image.excite.co.jp/music/closeup/0705/yuzu_photo.jpg)) より転載

更に少し遅れて登場したのが、大阪を拠点に活動をしてきた西の横綱ことコブクロである。

2001年に『YELL』でデビューした彼らは、ゆず・19に次いで、第三のネオフォークデュオと呼ばれ、数々の名曲を発信してきた。特に芸能人

カップルの結婚式で『永遠にともに』が演奏された後はCMやドラマの主題歌などのタイアップが増え、名実共にトップアーティストとなった。この3組が登場した90年代後半から2000年代

前半には街中にアコースティックギターを使用し、路上で演奏するユニットが数多く現われた。2000年代になってからメジャーシーンで特に注目を集めたのは有線でじわじわと人気を集め、ロングヒットとなった『青いベンチ』でデビューした、

北清水雄太と奥山裕次のサスケだ。大宮駅でストリートライブを行っていた彼らが「子ゆず」という名でゆずのライブ会場やライブハウスなどで前座を務めていたことはファンの

間では有名である。2009年に解散した今でも楽曲を

人気アイドルがカバーするなど話題となっている。

また『恋愛観察バラエティー あいのり』（1999—2009）の主題歌『Fate』で

2008年にデビューした、島根出身の兄弟デュ



サスケ「青いベンチ」※2

オ・遊吟<sup>iii</sup>も、ゆずの

影響を受け地元・松

江駅前でストリート

ライブを行っていた。

活動を始めた98年当

時、兄・伸治は15歳、弟・卓は11歳だった。その後彼らは僅か人口70万人の島根県内で半年間に

一万枚を売り上げ、全国に進出<sup>iv</sup>。現在も東京と

島根を行き来しながら活動している。



遊吟 ※3

ブームに乗るようにNHKで放送された『熱唱オンエアバトル』<sup>v</sup>（2005—2006）から

もタオルズ・ケイタク・ヤドカリなど地方のストリートシーンで活躍していたアーティストが注目

され、全国的に知られるようになった。

### ストリートに惹かれる理由

ストリートライブにおいて通行人の足を止めるためにはただ歌が上手ければよい、というものでも、良い詞であればいい、というものでもない。

確かに注目を集めるコツとして、『高いキーの方が雑踏にまぎれない』だとか、『サビに入るまでの間隔が短い曲の方がいい』だとか言われている

が、沢山の人を惹きつけるのはそんな小手先の技術だけではないだろう。ストリートライブ、そして

ストリートミュージシャンの魅力とは一体何だ

ろうか。

一番の魅力は、音楽を気軽に楽しめることだ。

ストリートライブは当然ながら無料である。好きな時に行つて、好きな時に帰ることができる。機

材が少なく、最低限の楽器しか使用しないため、場所の制約も少なく、様々な場所で活動することが

できる。駅前など人通りの多い所では、わざわざ見に行つたつもりはなくても、偶然に出会うこ

ともある。その反面、固定客をつかむのが難しい

ように思われるかもしれない。かつて、ゆずは毎週日曜日10時松坂屋前、と日時と場所を決めて活

動をし、固定客をつかんでいたが、現代のストリート事情では、Twitter等の活用により、不定期な

活動であってもファンが集まりやすいようになっ

ている。同時に人が集まりすぎて警察からの停止命令を受けるのを防止する役割も果たしている。

デビューしてからも、機動力は非常に強い武器となる。3・11以降、被災者を元気づけるための活動として、ゆずはいち早く動き、仙台の路上で

ストリートゲリラライブを行った。その日は元々全国ツアーの東北公演が予定されていた日であり、

本来だったら数万人の観客を前にするはずだったが、その日集まった人にとって、より大きな歌の力を感

じられるライブになったに違いない。ストリートミュージシャンの魅力は形態だけで

※2) サスケ「青いベンチ」CDジャケットより転載

※3) musicman-NET (<http://www.musicman-net.com/artist/15195.html>)より転載

はない。彼らの歌の中身にも魅力がある。ストリートで音楽を始めるのは百人百様のきっかけがあるだろう。もちろん趣味として外で歌っている人も数多くいる。しかし、ストリートからメジャーシーンに上がってくるアーティストは多くの困難を乗り越えている。まずは、もちろん客がつかないということ。そして、お金がかからない反面、儲からないということ。更に冬は寒いし、天候にも影響を受ける。また、酔っ払いなどに絡まれることも多いし、人が集まったら集まったで警察が止めに来たり、移動命令を出されたりする。文字通り国家権力に逆らいながら歌うのだ。先に挙げたストリート出身アーティストの有名な楽曲を見ると明るいものが多く、ストリートミュージシャン＝爽やかだと受け取られがちだが、そんなことはない。芯が強く、根性がないと出来ないのだ。そんな反骨精神はゆずの『てっぺん』<sup>vi</sup>という曲の歌詞を見ると読み取ることができる。

六大学出のインテリの坊ちゃんには  
四回死んでもわかんねえだろうけど  
お前らがトップにいるのなら  
この世のトップにいるのなら  
目指す道はただ一つ 最強のバカになってやる

これは路上時代から歌われてきた楽曲であり、現在でも節目の場で歌われる。平成爽やかフォークデュオと呼ばれてきた彼らのイメージとは違った一面を垣間見ることが出来るだろう。ゆずはかつてインタビュで路上で歌い始めた理由を「他に居場所が無かったから」だと語っている。孤独さから始まった歌が、いつしか人の心をつかむようになり、沢山の人が足を止め、彼らの音楽を聞くようになった。そんな、誰かのために作られた歌ではなく、悪い言い方をすれば「一人よがりな歌」が結果として他の人の心を動かすことがある。例えば遊吟の『咲く唄』だ。

道端に咲く花 踏みにじる人たちに  
散ることの痛みは 分かることはないだろう  
ただ一人叫んだって 世界は表情を変えない  
今はまだ名もない歌でも誰一人振り向かなくても  
自分の胸の奥にある 咲く唄を忘れないで

内容はあくまでも路上で歌う自分自身の事を書いていくのだが、「唄」を何かの表象だと考えると聞き手側一人一人違った「咲く唄」をイメージして聞くことができる。真っすぐで飾らない言葉だからこそ共感を生むことができるのだ。

最小の設備にして最大の効果を発揮するスト

リートミュージシャン。新たにストリートシーンからメジャーデビューを果たし、トップアーティストとなって音楽業界の台風の目となるミュージシャンが現われるのだろうか。今後に期待である。

- i 2011年オリコン調べ
- ii 活動期間1988年～1997年。宮田和弥・森純太・寺岡呼人・小林雅之のバンド。寺岡呼人は現在『トイレの神様』等の楽曲のプロデューサーとして活躍している。
- iii 土江伸治・土江卓の実の兄弟デュオ。鳥根県出身。2008年にメジャーデビュー。以降、情報番組のエンディングテーマやハリウッド映画の主題歌などを手がけている。
- iv 2007年発売の『あの日の二人のように』によって。その後、メジャー3rdシングルとして再発売されている。
- v 放送期間2005～2006年。NHKで『爆笑オンエアバトル』と隔週で放送されていた。
- vi 1stミニアルバム『ゆずの素』収録曲。  
作詞・作曲／岩沢厚治
- vii 1stシングル『Fate』収録曲。  
作詞・作曲／卓